第 2 章
計画地の現状

第１節　調布市の市勢

下布田遺跡が所在する調布市は，東京都のほぼ中央，多摩地域の南東部に位置する。市域の東側は世田谷区と狛江市，北側は三鷹市と小金井市，西側は府中市，南側は多摩川を挟んで稲城市，神奈川県川崎市と接している。東西７．０㎞，南北５．７㎞，総面積は２１．５８㎢である。

令和３年１月時点の住民基本台帳に基づく人口は，２３７，８１５人（１２１，２９６世帯）である。

本市の中央部を，鉄道路線（京王電鉄）や主要幹線道路（中央自動車道・国道２０号（甲州街道））が東西に横断し，都心からのアクセスは良好である。

京王線や国道２０号を中心に市街地が形成され，交通の利便性の高い都心近郊でありながら，比較的自然環境に恵まれていることから，人口及び宅地の割合が増加している。平成２８年４月１日時点での土地利用区分別の面積比は，宅地が８５％と最も高い数値を示しており，市街化が進む一方，農地は年々失われつつある。

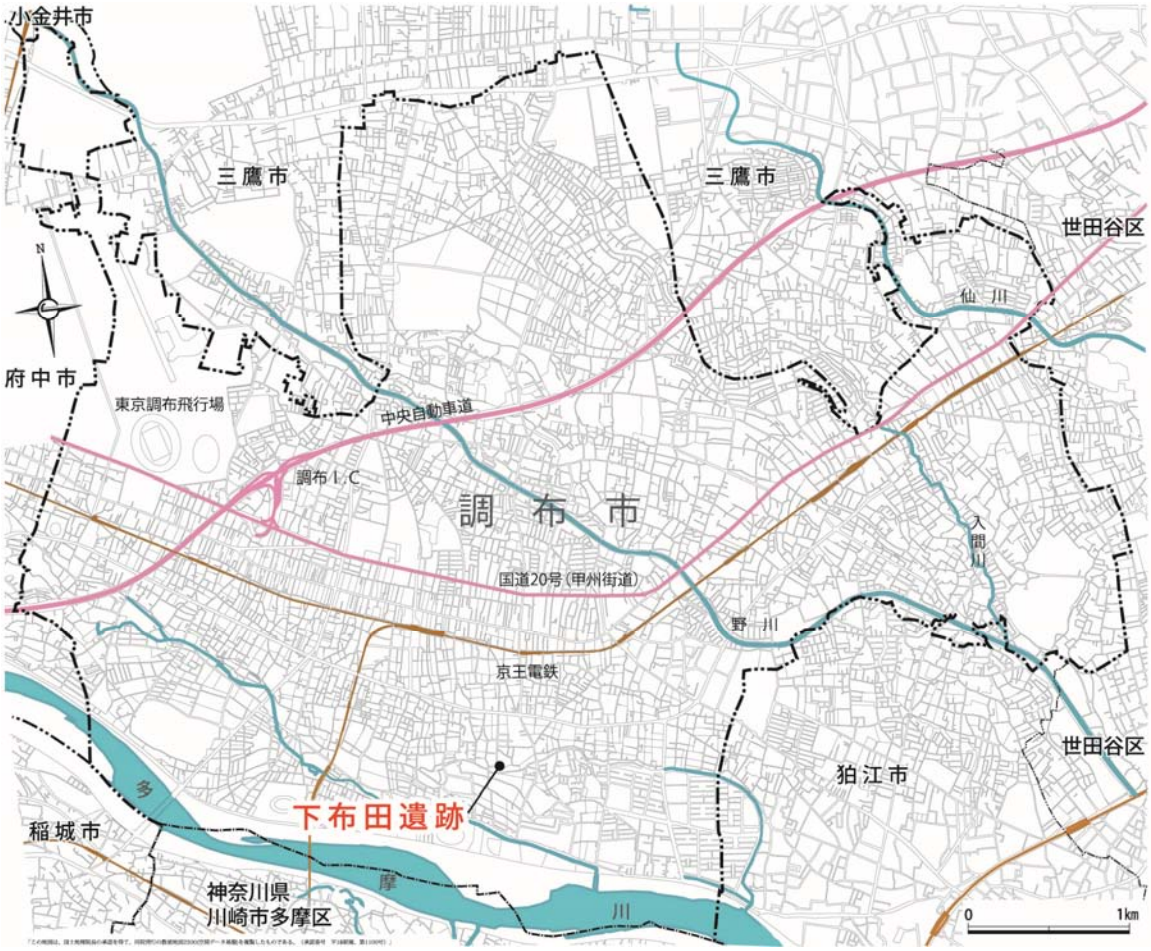


図３　調布市域と史跡下布田遺跡位置図

第２節　調布市の自然環境

１．地形と水系

調布市は，多摩川中流域左岸に形成された武蔵野台地南縁部に位置する。市域の地形を概観すると，多摩川沿いの沖積低地と２段の河岸段丘（武蔵野段丘・立川段丘）から成り，高位の武蔵野段丘面が標高５５～４２ｍ，低位の立川段丘面が４０～３２ｍ，多摩川沖積低地が２８～２４ｍを測り，それぞれ多摩川下流に向かって漸次低くなっていく。武蔵野段丘は国分寺崖線，立川段丘は布田崖線※（府中崖線）と呼ばれる段丘崖により南辺を画される。布田崖線の比高差は，市域西部の府中市境で約１０ｍを測るが，多摩川下流へ向かうにつれて徐々に比高差を減じ，狛江市の小田急線狛江駅付近で沖積低地との差が不明瞭となる。一方，国分寺崖線は多摩川下流に向けて比高差を増し，市域東部の世田谷区境で比高差は約１５ｍに達する。これらの段丘崖を地元では「ハケ」と呼んでいる。かつてはハケ下の至るところで湧水が滲出し，なかでも市域北部の深大寺周辺は水量が豊富で，武蔵野段丘を北西方向へ刻む深い支谷が形成されている。

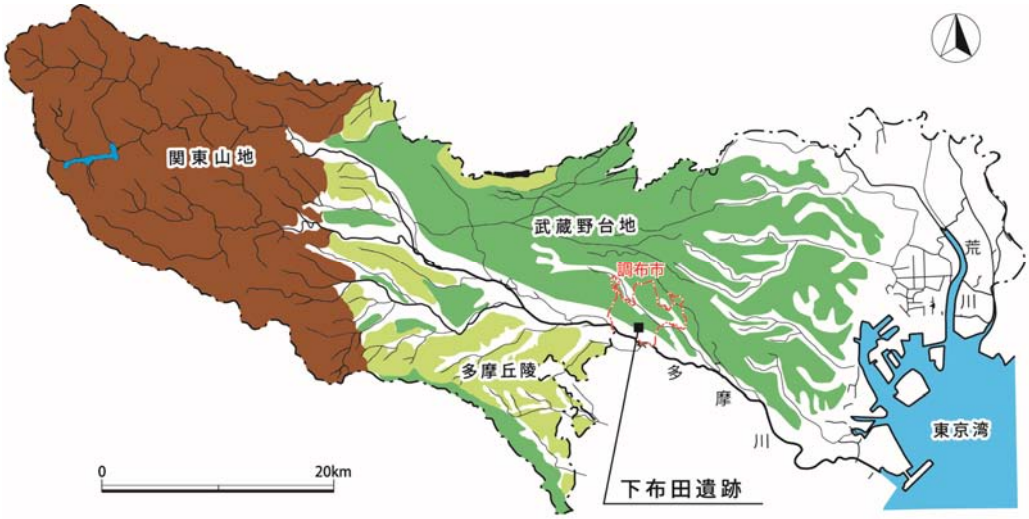


図４　東京都の地形区分図

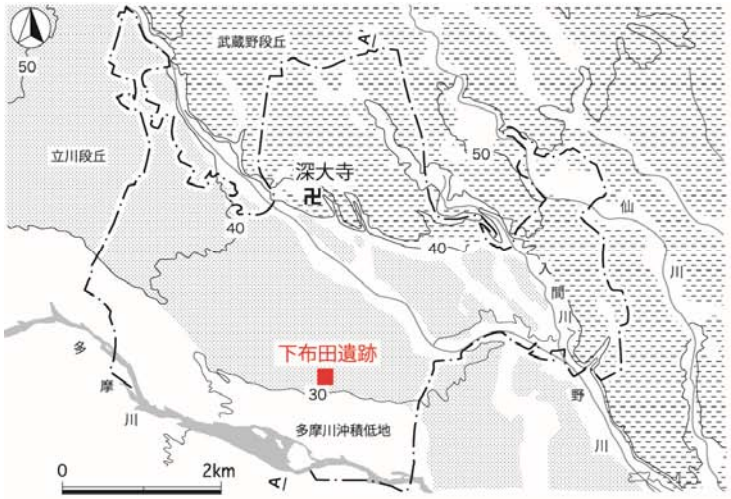


図５　調布市の地形区分図

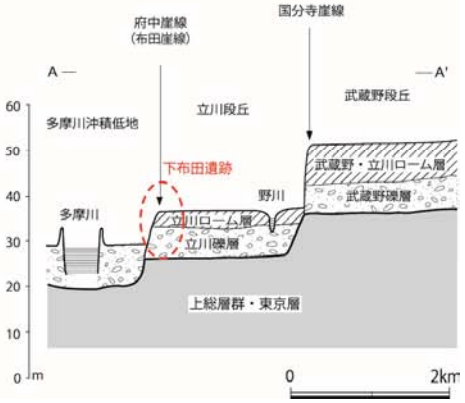


図６　調布市の地形断面模式図

市域には，これら湧水を水源として野川，入間川，仙川等の小河川が北西から南東方向に流れ，多摩川へと流れ込む。これら小河川により支谷が開析され，武蔵野台地の中でも地形の変化に富んだ地域となっている。

※府中崖線に連なる，調布市飛田給，品川通り南側から狛江市境に至る崖線の呼称。

２．植生

調布市が位置する関東平野は，東日本型気候（太平洋岸型気候）に属し，冬の季節風と乾燥，夏の高温多湿が特徴である。市域の潜在植生は，シラカシ，アカガシ，ヤブツバキの常緑広葉樹や，エノキ，ムクノキ，ミズキ，エゴノキ等の落葉広葉樹に，マツ類，スギ，ヒノキ，カヤ等の針葉樹から成る温帯混合林である。また代償植生（里山，雑木林）としてのクヌギやコナラなどがある。

昭和６２年から平成５年にかけて，調布市の緑被地（緑被率）は７７９．７８ha（３５．８％）から７８９．９１ha（３６．７％）へ，緑被率が０．９％増加している。平成５年から平成１６年にかけては，７８９．９１ha（３６．７％）から７１５．５８ha（３３．２％）へ緑被率が３．５％減少し，平成１６年から平成２７年にかけては，７１５．５８ha（３３．２％）から６６９．９８ha（３１．０％）へ緑被率が２．２％減少，さらには平成２７年から平成３１年（令和元年）にかけても，６６９．９８ha（３１．０％）から６５２．９０ha（３０．３％）へ，緑被率が０．７％減少している。

このように，緑被地及び緑被率は平成５年から減少を続けている。樹林地である山林・平地林の減少，市街地の拡大に伴う田畑，果樹園・苗圃，草地の減少が顕著な状況において，布田崖線に残された史跡下布田遺跡の樹林地及び草地は，市域における希少な緑地となっている。

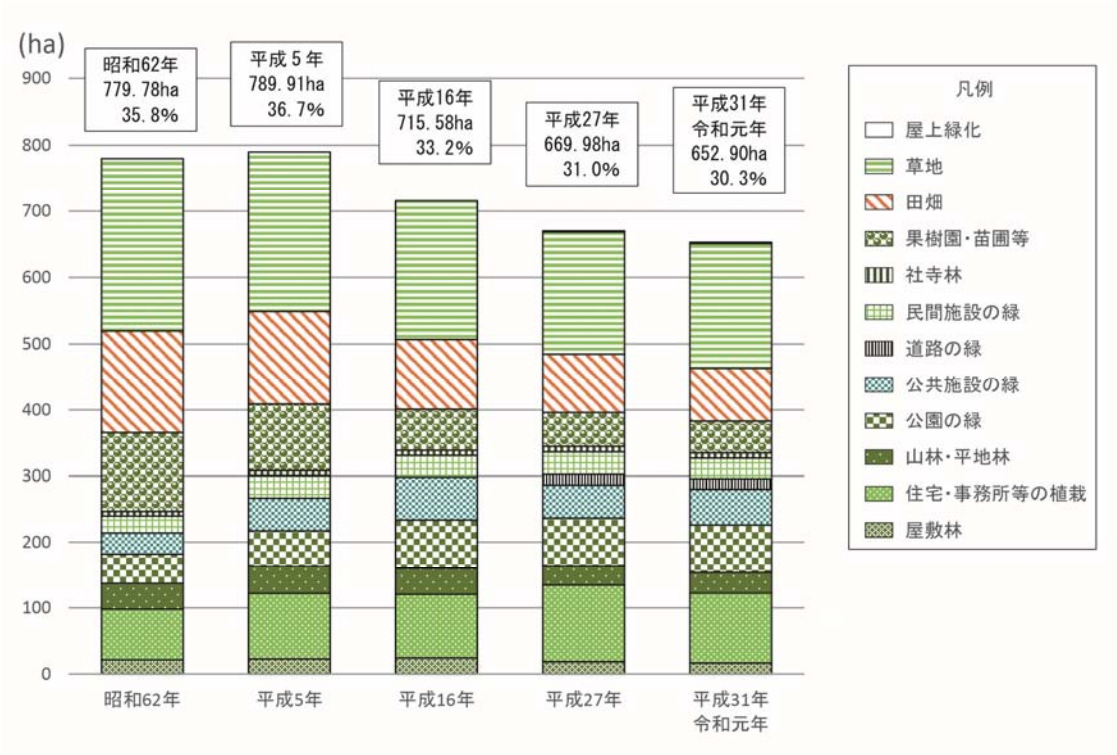


図７　調布市緑被地・緑被率の変遷（調布市緑化基本調査　令和元年度）

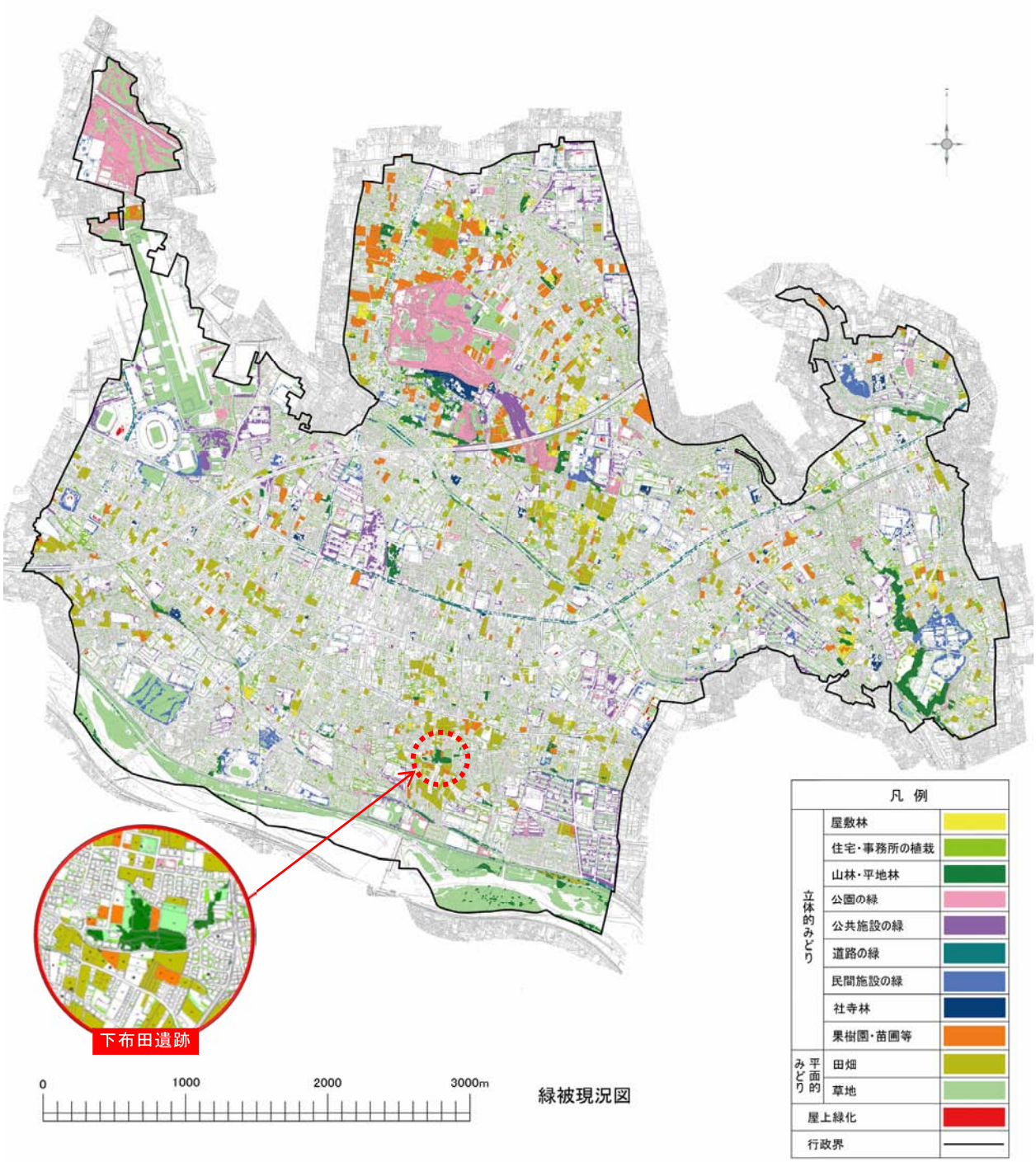


図８　調布市緑被地等の分布（調布市緑化基本調査　令和元年度）

第３節　調布市の歴史的環境

調布市域には現在，６５か所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている（図９）。

遺跡の分布状況を地形区分ごとに概観すると，多摩川沖積低地では，現時点で遺跡の分布はほとんど認められず，わずかに染地遺跡［４９］の１遺跡を数えるのみである。

立川段丘面では，段丘南縁部と野川流域沿いに分布の集中が認められる。段丘南縁部では，布田崖線沿いを帯状に連続して遺跡が分布している（飛田給遺跡［３８］・上石原遺跡［３９］・下石原遺跡［４０］・小島町遺跡［４４］・上布田遺跡［４５］・下布田遺跡［４６］・国領南遺跡［４７］・上ケ給遺跡［４８］）。また，立川段丘と武蔵野段丘を画する国分寺崖線に沿って流れる野川流域では，左右両岸に遺跡が分布している（右岸：野川遺跡［２７］・野水遺跡［６３］・富士見町遺跡［６４］・中耕地遺跡［３５］・北浦遺跡［３６］・調布岡遺跡［３７］，左岸：宮田前遺跡［２８］・ませぐち遺跡［２９］・原山遺跡［３１］・本村遺跡［３３］）。

武蔵野段丘面では，段丘南縁部の国分寺崖線沿いに連続して遺跡が分布している（宿遺跡［１６］・寺山遺跡［１８］・東原遺跡［１９］・仁王塚遺跡［２２］・深大寺城山遺跡［２３］・池ノ上遺跡［２１］・上野原遺跡［２５］・若葉町遺跡［6］・入間町城山遺跡［8］）。また，市域北東端部を流れる仙川の左右両岸にも，遺跡の分布が認められる（右岸：仙川遺跡［5］，左岸：北野遺跡［６５］・緑ヶ丘

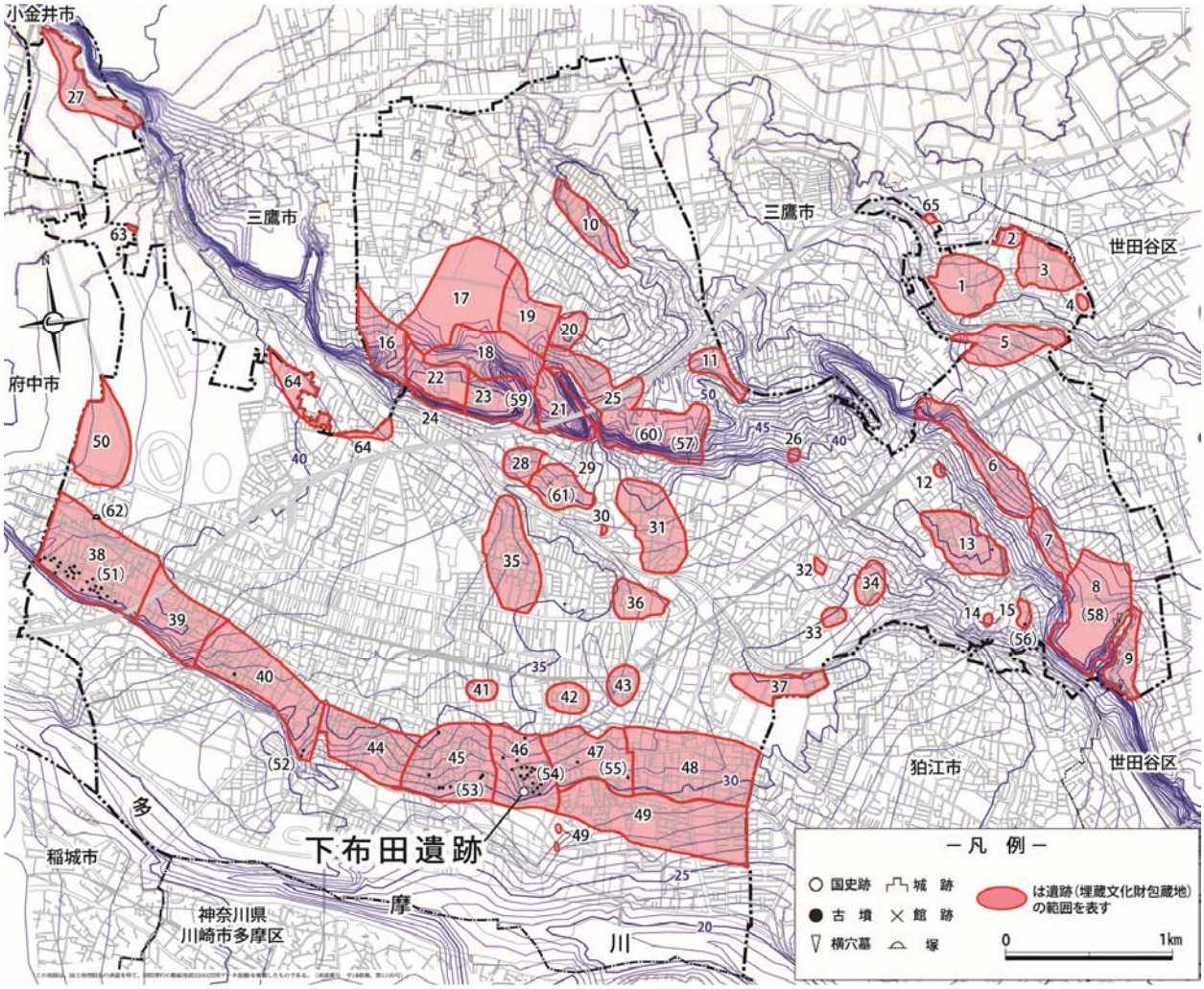


図９　調布市内遺跡分布図

遺跡［1］)。

次に，市域における各時代の様相について，下布田遺跡が位置する立川段丘面の遺跡群を中心に概観する。

１．旧石器時代【約４万年前～１５,０００年前】

旧石器時代の遺物は，立川段丘南縁部では飛田給遺跡，上石原遺跡，上布田遺跡，国領南遺跡で確認され，上布田遺跡では槍先形尖頭器(やりさきがたせんとうき)が，国領南遺跡ではナイフ形石器や礫群(れきぐん)が検出されている。また，崖線よりやや離れた段丘平坦部に立地する飛田給北遺跡では，ナイフ形石器や角錐状石器(かくすいじょうせっき)，掻器(そうき)，削器(さっき)のほか，石皿状石器が出土している。

野川流域では，野水遺跡，野川遺跡，富士見町遺跡，入間町城山遺跡などが野川流域遺跡群として，国内でも有数の旧石器時代遺跡群として知られている。

２．縄文時代【約１５,０００年前～2,５００年前】

縄文時代では，早期から晩期までの土器が検出されているが，明確な居住施設が確認されるのは中期以降である。中期（約５，５００～４，４００年前）の集落跡としては，飛田給遺跡で竪穴住居跡約６０軒，敷石住居跡２軒が検出され，拠点的集落の存在が想定されている。また，小島町遺跡，上布田遺跡，下布田遺跡，国領南遺跡では，竪穴住居跡が単発的に検出されている。

中期末葉～後期初頭（約４，７００～４，２００年前)になると，上布田遺跡から下布田遺跡にかけて小規模集落が営まれ，両遺跡を隔てる埋没谷の周辺部で竪穴住居跡１軒と敷石住居跡６軒が検出されている。このうち上布田遺跡（第２地点）で検出された４号敷石住居跡は，いわゆる「柄鏡形敷石住居」で埋甕(うめがめ)２基を伴う。出土遺物として，埋甕，深鉢，小型鉢，蓋形土器，大型石棒，石皿などがあり，このうち確実に住居に伴うと考えられる１３点については，市指定有形文化財に指定されている。

後期前葉～中葉（約４，５００～３，６００年前)では，下石原遺跡で集団墓を伴う集落が確認されている。舌状台地の先端部に形成された浅い窪地を取り囲むように，竪穴住居跡２軒と敷石住居跡１軒が，土壙墓６５基とともに検出されている。また上布田遺跡では，埋没谷で土器棺墓が発見され，加曽利Ｂ式の半完形品も出土していることから，周辺域に後期集落が存在した可能性が高い。

縄文時代晩期（約３，４００～２，５００年前)では，飛田給遺跡，上布田遺跡，下布田遺跡，染地遺跡などで遺物が検出されているが，集落跡が確認されたのは下布田遺跡と染地遺跡のみである。染地遺跡は，下布田遺跡から約３５０ｍ南東の多摩川沖積低地に立地し，古代遺構確認面の下層から配石遺構や焼土跡を伴う土坑，晩期遺物集中域が検出され，下布田遺跡との関連性が注目される。

３．弥生時代～古墳時代【約2,５００年前～７世紀頃】

弥生時代になると遺跡数は減少し，集落跡が確認されたのは，多摩川沖積低地の染地遺跡，

武蔵野段丘縁辺部の深大寺城山遺跡，入間町城山遺跡のみである。従来，市域における弥生文化の導入は後期以降とみられていたが，平成２９年度に行われた入間町城山遺跡の発掘調査で，竪穴住居跡が検出されたことから，中期後葉まで遡ることが明らかになった。

古墳時代になると，多摩川を臨む立川段丘縁辺部に，４世紀前半から５世紀前半にかけて方形周溝墓が，５世紀前半から７世紀中葉にかけては円墳が盛んに築造される。分布状況から５つの古墳群にまとめられ，上流から飛田給古墳群，下石原古墳群，上布田古墳群，下布田古墳群，国領南古墳群と名付けられている（図１０）。なかでも下布田古墳群の狐塚古墳（下布田６号墳）は終末期古墳として都内最大級の円墳であり，都指定史跡に指定されている。狐塚古墳の築造以降，多摩川中流域は上円下方墳（府中市武蔵府中熊野神社古墳）などの特徴的な古墳が築造され，やがて府中に国府が置かれるなど，武蔵国の中心となっていく重要な地域である。

集落跡は，武蔵野段丘縁辺部の深大寺城山遺跡，野川流域沿いの本村遺跡，調布岡遺跡で前期集落が確認され，立川段丘南縁部の上ケ給遺跡や調布岡遺跡などでは中期集落が確認されている。後期になると遺跡数は増加し，立川段丘南縁部に連なる飛田給遺跡から下布田遺跡にかけての各遺跡や，多摩川沖積低地の染地遺跡，武蔵野段丘縁辺部の寺山遺跡，仁王塚遺跡，深大寺城山遺跡，入間川流域の中台遺跡，入間町城山遺跡，仙川流域の仙川遺跡などが挙げられる。このうち立川段丘南縁部の各遺跡と染地遺跡の後期集落は，長期にわたって継続して営まれており，なかでも染地遺跡は，古墳時代後期から平安時代まで続く市域でも最大規模の古代集落で，これまでに１００軒を超える竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されている。また，対岸に位置する川崎市寺尾台廃寺と同様，稲城市瓦谷戸瓦窯で焼かれた８世紀中葉の剣菱文軒

図１０　古墳群と中期の集落

丸瓦が出土しており，古代寺院の存在も想定される。

４．古代【７世紀中頃～１２世紀】

律令時代の市域西部は，武蔵国多磨郡小島郷に属していたと考えられている。これまでに官衙に関連する遺構は確認されていないが，官人が身に付けた銙帯（金属や石などで装飾を施した腰帯）の部品が飛田給・上石原・下石原・上布田・下布田・染地の各遺跡から出土している。なかでも上布田遺跡の巡方は約３．５㎝四方の金銅製で，かなり上級の官人用だった可能性がある。また上石原遺跡では，焼損はしていたものの，９世紀初頭に京都府栗栖野瓦窯（官窯）で生産された二彩多口瓶（都指定有形文化財）２個体が出土し，下布田遺跡の沖積低地部では，鋤柄や櫛などの木製品とともに「国厨」の墨書土器（９世紀中頃）が出土しており，武蔵国府との関連が注目される。

銙帯金具（染地遺跡出土）

５．中世【１２世紀～１６世紀】

１０世紀末以降は遺跡の分布が希薄となる。下石原遺跡では１万枚を超える大量の出土銭とともに中世居館の区画溝が検出されており，太田道灌の曾孫にあたる太田康資（新六郎）系列の太田氏，または康資と主従関係にあった石原氏の居館跡と推定されている。上布田遺跡内には，布多天神社（延喜式内社）の故地とされる古天神跡があり，文明年間（１５世紀後半）の洪水により甲州街道北側の現在地に遷座したと伝えられるが，これまでのところ古天神跡周辺で神社の存在をうかがわせる遺構・遺物は確認されていない。このほか上布田遺跡，下布田遺跡，飛田給遺跡では，地下式坑や集石土壙墓，積石墓など中～近世の墓域が確認されている。また，武蔵野段丘南縁部には，天文６年（１５３７）に扇谷上杉氏によって築城された深大寺城跡があり，国指定史跡に指定されている。

６．近世以降【１７世紀～】

江戸時代，調布市域の村は１８か村あり，その大部分は天領(幕府の直轄地)と旗本領であった。また，五街道の一つである甲州街道が市域を横断し，街道に沿って宿場が設けられた。布田五宿（国領・下布田・上布田・下石原・上石原）は交替で宿駅の人足・伝馬を担い，近隣の村々は助郷として支えた。この布田五宿は全体で３km 余りの長さがあり，街道沿いにまち並みが形成されていった。

近代に入ると，京王線の開通，甲州街道の整備等による交通基盤が整えられ，次第に調布市域は行楽地・郊外住宅地として注目されるようになり，大正１２年（１９２３）の関東大震災をきっかけに多くの人々が移り住み，工場進出も増えた。昭和の初めには，京王閣や日活撮影所などの近代的な建物，商店や料亭なども続々と集まった。

昭和６年（１９３１）には甲州街道が舗装され，昭和１０年には稲城村と調布町を結ぶ多摩川

原橋が架橋され，産業開発と交通が大きく発展した。太平洋戦争開戦後は，軍需工場が市域に進出するとともに，首都防空のための陸軍調布飛行場の竣工をはじめ，照空隊陣地等が国分寺崖線・布田崖線沿いに整備された。

明治時代末期の甲州街道

京王電気軌道開通当時の調布駅

昭和３０年に調布町と神代町が合併し，人口４万５，０９０人，１万３９１世帯の「調布市」が誕生した。この頃から団地が造られて人口急増が進み，昭和４０年には１０万人を突破し，平成１２年には２０万人に達している。下布田遺跡の周辺もかつては田畑が広がっていたが，近年は宅地化が進んでいる。

第４節　調布市の社会的環境

１．土地利用

調布市は，都心に近接した地域でありながら，豊かな自然環境に恵まれている地域である。一方で市街化の進展により，市域内の約５４％を宅地が，次いで約１７％を道路等が占めており，宅地と道路で市の面積の７割を占めている。

戦後の畑地利用においては，都心近郊に位置する調布市域の農家の収入源として苗圃が増加した。昭和３０年の市制施行当時は，田・畑が６割を超えていたが，その後の市街化の進展により宅地が大幅に増え，平成１７年には田・畑の割合が２割以下に減少している。

市街地化が進む本市において下布田遺跡の周辺も例外ではなく，宅地化が進行している。下布田遺跡が所在する布田６丁目は，平成１６年度以降土地区画整理事業が行われ，都市農地の宅地化が進んで，市街化が促進された地区である。

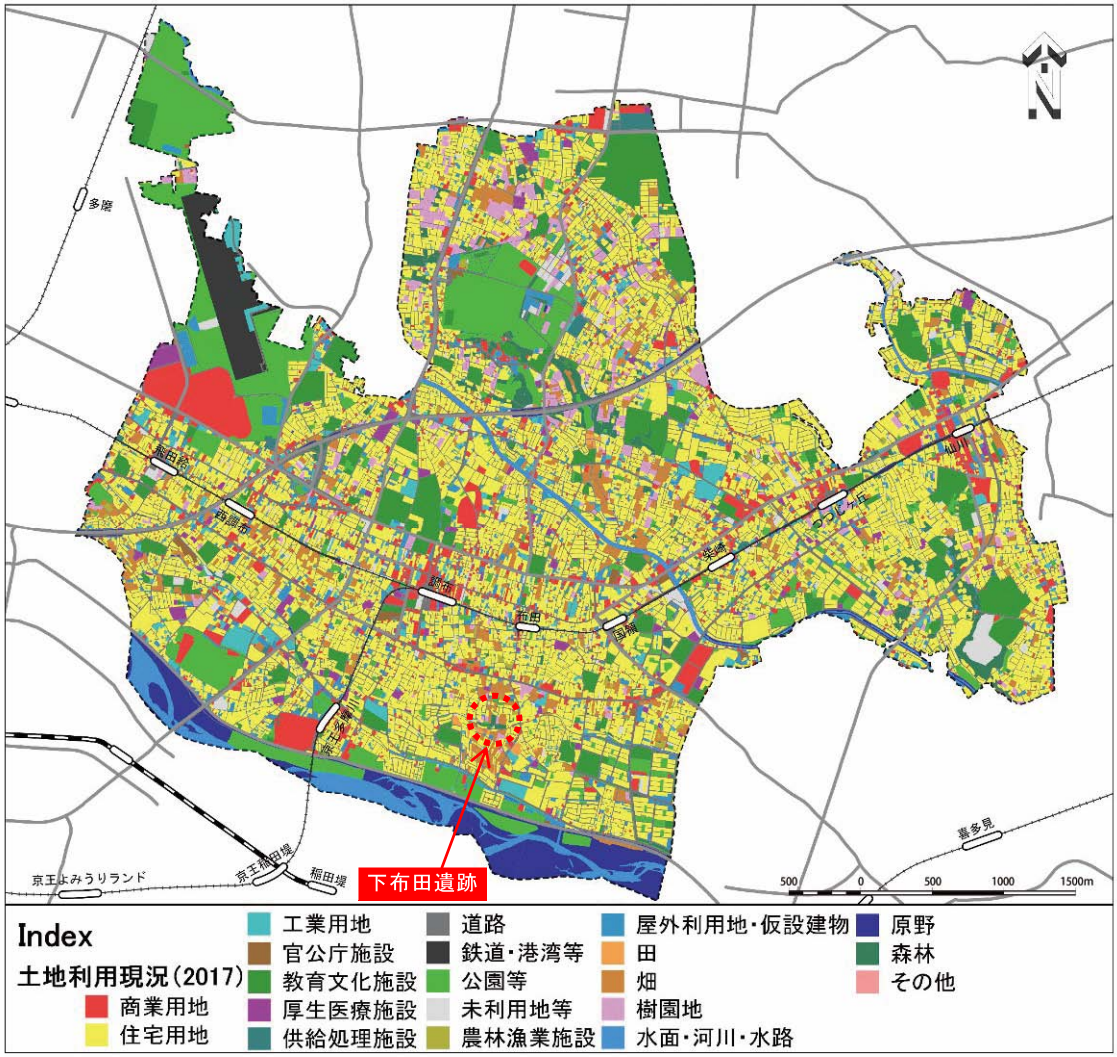


図１１　調布市の土地利用現況図（平成２９年度土地利用現況調査）

２．交通

調布市の主要な交通網について，主要道路としては，中央自動車道が市域の北東部から南西部にかけて通り，調布インターチェンジが所在している。また，国道２０号（甲州街道）が市域中央を横断し，市域北端を東八道路（東京都道１４号新宿国立線）が横走する。これらの主要幹線は市域の中央から北部にかけて通っているため，市域南部に位置する下布田遺跡とはやや離れた距離にある。

国道２０号の南側には，京王線が市域中央を東西に横断するように走り，調布駅からは京王相模原線が枝分かれして，京王多摩センター駅方向へと南下する。市内には駅が９駅所在するが，このうち下布田遺跡への最寄駅は，調布駅及び布田駅である。このほか品川通りや桜堤通りにはバス路線が運行しており，停留所からのアクセスは容易である。

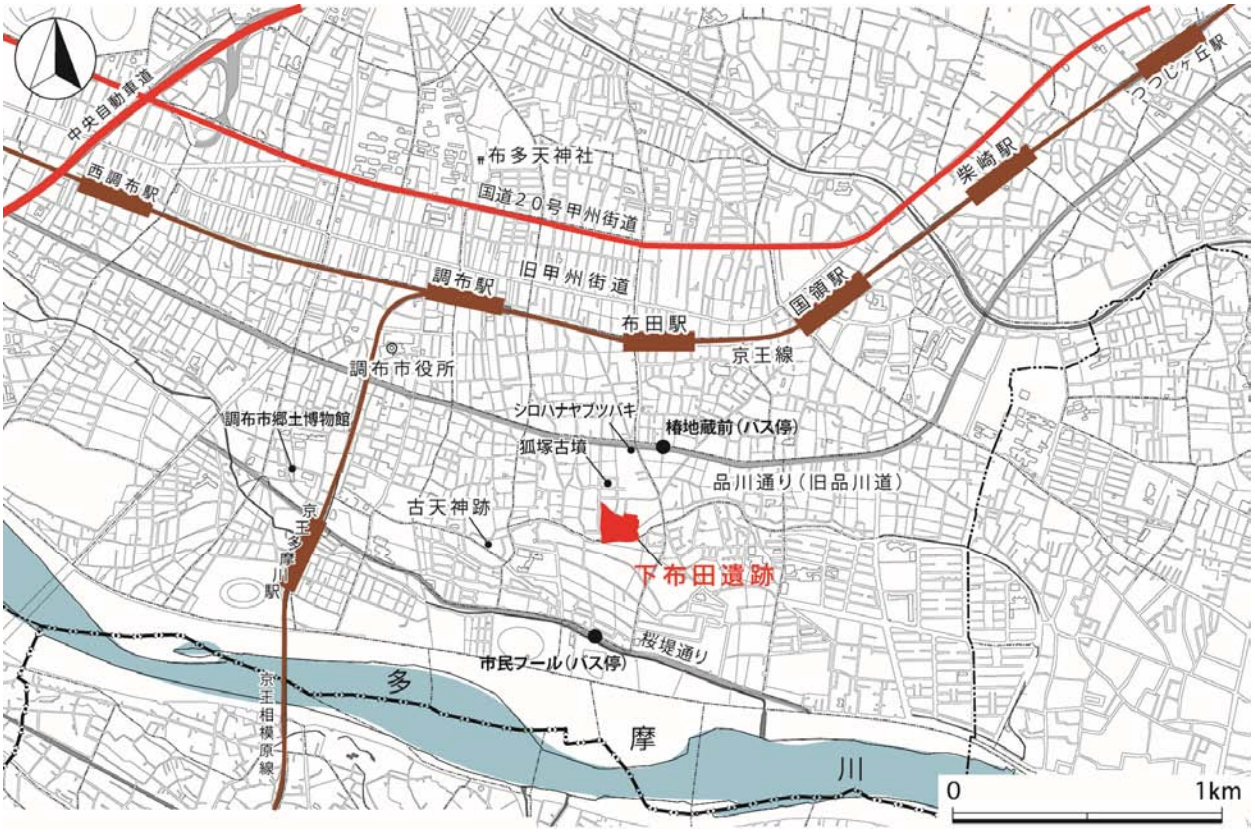


図１２　下布田遺跡周辺の交通網

３．文化財

調布市内にある指定・登録文化財は，国指定文化財が４件，国登録文化財が９件，東京都指定文化財が４件，市指定文化財が５９件を数える（令和２年４月１日現在）。このうち主なものを，以下に挙げる。

①国史跡深大寺城跡

深大寺城は，扇谷上杉氏によって築造された平山城で，武蔵野段丘の南縁部，標高約５０ｍ

の舌状台地先端部に立地する。深大寺城は３つの郭から成り，また築城年代は大きく２期に分けられる。第１期は，１５世紀末（１４９０年頃）に扇谷上杉定正が関東管領山内上杉氏に対抗して築城したもので,『河越記』等の文献資料にみられる「ふるき郭」はこれにあたる。第２期は，１６世紀前半，南関東を巡る後北条氏との攻防の中で，扇谷上杉朝定が再築城したもので，多摩川を挟んで北条方の小沢城と対峙する。天文６年（１５３７）北条氏綱は深大寺城を攻めることなく，直接，扇谷上杉氏の本拠，川越城を攻め落としたため，その役割を果たすことなく，そのまま廃城となったとされる。

深大寺城跡は，現在神代植物公園の分園である水生植物園内に，第１郭・第２郭で確認された土橋や土塁，空堀などが復元整備され，一般公開されている。

国史跡深大寺城跡　（左：水生植物園から　右：第２郭整備状況）

②都史跡狐塚古墳（下布田６号墳）と下布田古墳群

下布田古墳群は多摩川中流域左岸，立川段丘縁辺部に立地する古墳群で，５世紀前半から７世紀前半にかけて造営された。これまでに，東西約２６０ｍ，南北３５０ｍの範囲から円墳２０基が確認されており，このうち３基（１・２・１４号墳）が史跡下布田遺跡地内に位置する。古墳群のうち墳丘が残されていたのは狐塚古墳（下布田６号墳）のみで，主体部は狐塚古墳と１０号墳で横穴式石室が検出されている。古墳群の大半は周溝の一部を確認しただけである。

狐塚古墳（下布田６号墳）は古墳群のほぼ中央に位置し，史跡下布田遺跡からは約５０ｍ北方にあたる。地元では古くから「狐塚」と呼ばれ，古墳として認識されていた。発掘調査の結果，墳丘径（周溝内径）約４４ｍ，周溝外径約６６ｍを測る，都内で最大規模の円墳であることが明らかになった。埋葬施設として半地下式の横穴式石室が検出された。副葬品は，羨道に近い石室西壁下より鉄製大刀３点，小刀１点，鍔２点，刀子１点，鉄鏃１点がまとまって検出

狐塚古墳現況（左）・石室（右）

された。

このほか，墓道からは須恵器や土師器２４点が出土しており，これらの出土遺物から，狐塚古墳は，下布田古墳群の中でも最終段階の６世紀終末から７世紀初頭に築造されたものと考えられる。狐塚古墳は，古墳時代終末期になって多摩川中流域に地域首長墓が築かれるようになる最初期の古墳であり，多摩川流域における首長墓の変遷や消長を考察するうえで欠かすことのできない重要な古墳である。現在の狐塚古墳は，公園として公開されている。

③市天然記念物シロハナヤブツバキ

史跡下布田遺跡から北方２４０ｍ，品川通りと布田南通りとの交差点脇に，市指定天然記念物のシロハナヤブツバキが所在する。ツバキの根元には地蔵尊が祀られており，「椿地蔵」の名で親しまれている。このシロハナヤブツバキは，昭和４１年に東京大学名誉教授の故本田正次博士により樹齢７００～８００年の希少な老木と鑑定され，同年市指定天然記念物に指定された。

昭和３９年の品川通りの拡幅工事に伴い，原位置から約６ｍ南の現在地に移植された。元は幹周り約１．５ｍ，樹高約５ｍの大木で，主幹の根元から４本のひこばえが伸びていたが，交通量の増加に伴い主幹を含む３幹が枯れて，現在は１本の幹とその根株から発生した数本のひこばえが順調に育っている。

シロハナヤブツバキ

④古天神跡

布多天神社が，文明９年（１４７７）に甲州街道沿いの現在地に鎮座するまであったとされる故地で，史跡下布田遺跡の約４５０ｍ西方に位置する。現在は古天神公園として整備されている。発掘調査では，縄文時代の土坑・集石土坑，５世紀前半と思われる円墳３基（古天神１号～３号），古墳時代後期の竪穴住居跡３軒，中世の地下式坑・土坑墓・積石状遺構，近世の集石土坑などが検出されているが，これまでのところ「古天神」の存在を窺わせる遺構・遺物は確認されていない。

４．文化・観光施設

調布市内の主な文化・観光・教育施設を，以下に挙げる。

①調布市郷土博物館・郷土博物館分室

調布市郷土博物館は，史跡下布田遺跡から西方１．２㎞ に所在する。郷土博物館では，郷土の歴史や文化，自然に関わる考古資料，古文書，民俗資料など様々な資料を常設展示しており，下布田遺跡の出土遺物も展示している。学校教育連携事業として，例年，市内約２０校の小学３年生を対象に，展示解説と昔の道具体験学習を行う郷土学習展として「ちょっと昔の暮らし」展を開催している。

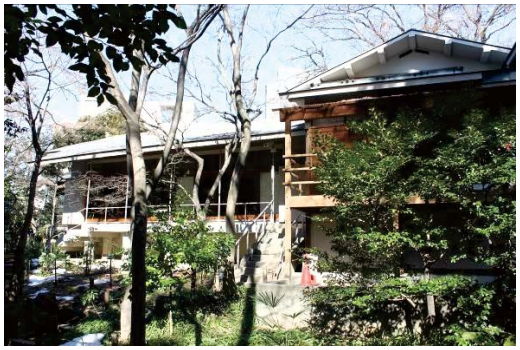
また，郷土博物館は，市内に所在する文化財に関する事務を担っている。史跡指定地の西側

に隣接する郷土博物館分室は，現在は主に調布市遺跡調査会の事務所として利用している。通常公開はしていないが，１階展示スペースでは，下布田遺跡をはじめ市内遺跡から出土した考古資料を展示しており，事前予約制で見学対応している。このほか，史跡下布田遺跡で活用事業を行う際の会場や休憩所などとして利用している。

調布市郷土博物館（左）・常設展示室（右）

②調布市武者小路実篤記念館・実篤公園

市域の東端部，京王線仙川駅またはつつじヶ丘駅から徒歩１０分のところに，武者小路実篤記念館と実篤公園がある。明治から昭和にかけて文学，美術，思想，演劇と幅広い分野で業績を残した武者小路実篤は，昭和３０年から昭和５１年に逝去するまでの２０年間をこの地に暮らした。邸宅と敷地は，実篤の死後，遺族より数々の遺品等とともに，調布市に寄贈され，実篤が暮らしていた当時のままに保存されている。昭和５３年からは「実篤公園」として公開され，市民の憩いの場として親しまれている。昭和６０年には，隣接地に実篤の生涯と著作，所蔵品を紹介する武者小路実篤記念館が開設され，文学や美術など多様なテーマによる企画展示が開催されている。なお，旧邸は国登録有形文化財に登録されている。



旧武者小路実篤邸外観（左）・仕事部屋（右）

③調布市文化会館たづくり

京王線調布駅から徒歩３分，市役所の東側に隣接して建つ調布市文化会館たづくりは，学習活動，文化活動などの複合施設である。館内にはホール，会議室，展示室，ギャラリー，中央図書館，コミュニティＦＭ放送局などがあり，個人・グループで様々な活動に利用されている。

文化会館たづくりでは，平成１８年度に「調布市遺跡調査会３０周年記念遺跡展　発掘の歩みと最新成果」を開催し，市内の発掘調査で出土した様々な遺物を展示したほか，平成２６年

度には東村山市，国立市，西東京市との共催事業として「多摩の遺跡発掘成果報告会」を開催し，下布田遺跡の調査成果の報告を行った。このほか，毎年市内の遺跡や文化財に関連したテーマで講演会を行っている。

④深大寺

深大寺は，天平５年（７３３）に満功上人が開山したと伝わる古刹である。江戸時代，慶応元年（１８６５）の大火により堂宇の大半は焼失し，現在の本堂は大正７年（１９１８）に再建されたものである。国宝「銅造釈迦如来倚像」（通称白鳳仏），重要文化財「梵鐘」など数多くの文化財を所蔵する。例年３月３・４日に行われる「厄除元三大師大祭」は，江戸時代の文献にも記されている歴史ある行事で，現在も２日間で１０万人もの参詣者が訪れる。また，元三大師大祭に併せて開かれるだるま市は，日本三大だるま市の一つとして全国的に有名である。

深大寺本堂

⑤深大寺水車館

深大寺深沙大王堂から約７０ｍ南西に位置する深大寺水車館は，この地で明治後半から昭和３０年頃まで使われていた水車小屋を復元したものである。文化・歴史・ぬくもりを持つ街の景観整備事業の一環として，平成４年に整備公開された。武蔵野台地の暮らしと生業を紹介する展示回廊を併設し，事前に予約すると，精米やソバ・小麦の製粉を体験することができる。

深大寺水車館

⑥布多天神社

調布駅の北側，甲州街道沿いに鎮座する布多天神社は，創建年代は明らかでないが，延長５年（９２７）に制定された「延喜式」にその名が記される式内社である。元々は立川段丘南縁部に所在していたが，多摩川の氾濫を避け，文明９年（１４７７）に現在地に遷座したと伝わる。江戸時代には布田五宿の総鎮守として五宿天神と崇敬され，境内で開かれる市は大変賑わったといわれる。現在も毎年９月に行われる例大祭や，月例祭では参道には市が立ち並び，天神の

布多天神社（左）・布多天神社狛犬（右）

市として親しまれている。

宝永３年（１７０６）に再建された本殿，寛政８年（１７９６）建立の狛犬，豊臣秀吉による小田原攻めの際の「太閤の制札」が市指定有形文化財に指定されている。

⑦都立神代植物公園・水生植物園

深大寺の北側に隣接する都立神代植物公園は，武蔵野の面影が残る都内最大の植物公園として，昭和３６年に開園した。開園面積約４９ha を誇る園内には約４，８００種１０万株の植物が植えられ，梅や桜の名所としても知られている。ばら園，つつじ園，うめ園などの花園，芝生広場，雑木林，大温室などがあり，春と秋のバラフェスタのほか様々なイベントが開催されている。

また，深大寺の南側に位置する神代植物公園の分園，水生植物園は，国分寺崖線から滲出した湧水が集まって湿地帯になっていたところに，木道などを整備して公開したもので，アシやハナショウブ，カキツバタなど多くの種類の水生植物を楽しむことができる。園内の一部は，深大寺城跡の第１・２郭にあたり，湿地帯は，深大寺城跡の外堀の役割を果たしたものと思われる。

図１３　調布市域の文化・観光施設